

一九三三年



六月



六月の遊星と太陽 (●逆行中 ○順行中)

六月の初めの位置					六月の終りの位置				
赤経順位	星座	光度	距離	記事	赤経順位	星座	光度	距離	記事
●1	土星	やぎ	+0.6 13,9500	後11時頃東天	●1	土星	やぎ	+0.5 13,6500	後11時頃東天
○2	海王星	しし	+7.8 45,6000	後驅の星	○2	海王星	しし	+7.8 46,1500	後驅の星
○3	木星	しし	-1.5 8,7000	日没の時既に東天にあり	○3	木星	しし	-1.4 9,1500	後驅の星
4	冥王星	ふたご	× ×		4	冥王星	ふたご	× ×	
●5	金星	ふたご	-4.0 4500	(宵の明星)	○5	水星	ふたご	-0.5 1,5000	(宵の星)
○6	太陽	うし	× ×		●6	金星	ふたご	-2.8 4500	觀望不能
○7	水星	うし	-1.6 1,9500	曉の星	○7	太陽	ふたご	× ×	
○8	火星	うし	+1.5 3,4500		○8	火星	うし	+1.6 3,3000	曉の星
○9	天王星	うを	+6.2 30,7500		○9	天王星	うを	+6.2 30,3000	

* 夏至 6月22日 水曜 午前0時23分 太陽が夏至點通過

* 入梅 6月11日 土曜

* 水星外合 6月13日 水星外合とは地球-太陽-水星の順に三天體が一直線上に空間的排列をなす現象です

* 金星内合 6月29日 地球-金星-太陽の空間排列
内合外合は内遊星に限られた現象であります

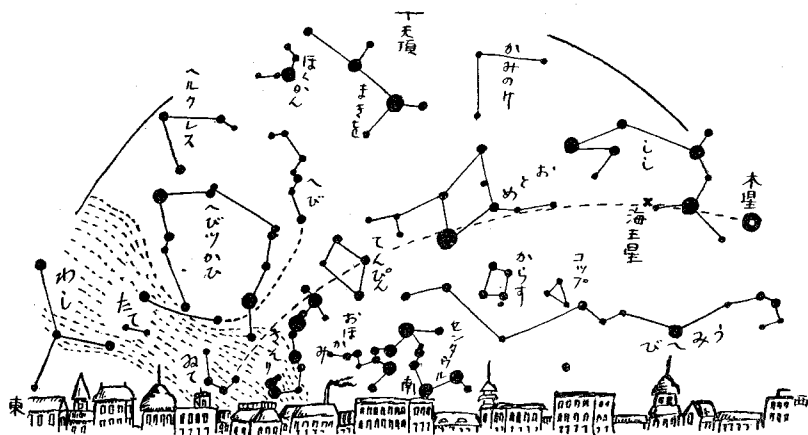
日の出日の入時刻	日の出	日の入	晝間	夜間
6月1日	前4時27分	後6時51分	14時24分	9時36分
6月16日	前4時24分	後6時58分	14時34分	9時26分

* 月の出月の入時刻と月の天象

	月の出	月の入	星座
新月 4日	前 3時46分	後 7時3分	うし
上弦 12日	前11 52	—	しし
満月 18日	後 7 9	前 3 23	へびつかひ
下弦 26日	後11 50	後 0 00	うを

月光の爲め16日頃より18日頃までは宵の空が、18日以後21日頃迄は曉の空が明るくされるので光度の弱い天體の觀望は避けなければなりません。

尙薄明の關係上本月は朝は午前3時45分以前、夕方は7時40分以後でないと觀測は出来ません。



六月の南天

〔小望遠鏡を持つ人々へ〕

〔小熊座〕

α UMi : 1h 32m N. 88°50′ 北極星, 1920年には天球の北極を去る1°7′の處にありますが, 2095年には26′30″以内に近づきます, これは19′離れた9等の副星を持った2等星です, 〔小熊A星〕

π UMi : * 15h 34m N 80°40′, 星(大熊ゼ星)の少し北, 6等と7等の二重星, 距離30″, 〔小熊B星〕

〔大熊座〕

M97 : 11h. 10m. N. 55°30′ 見た所では木星位の圓形の特徴ある遊星状星霧, 所謂“梟星霧”, で Rosse 卿が自分の反射鏡で眺めた時の印象から斯う命名したそうです. 〔メシア九十七番〕

ζ UMa : (Mizar) 13h 20m N 55°20′, 大熊の尾の中央星, 14″離れた2等と4等との見事な二重星, 80番星(Alcor)と11′離れた肉眼的二重星を作つてゐます. 〔大熊ゼ星〕

ξ UMa : 11h 14m N. 32°0′, 61年の週期を持つ二重星, 光度は夫々4½と5等で1933年には最も近く0.9″になります. 〔大熊クシ星〕

〔龍座〕

ν Dra : 17h 30m N. 55°15′, 2個の4½等星より成る二重星, 距離62″,

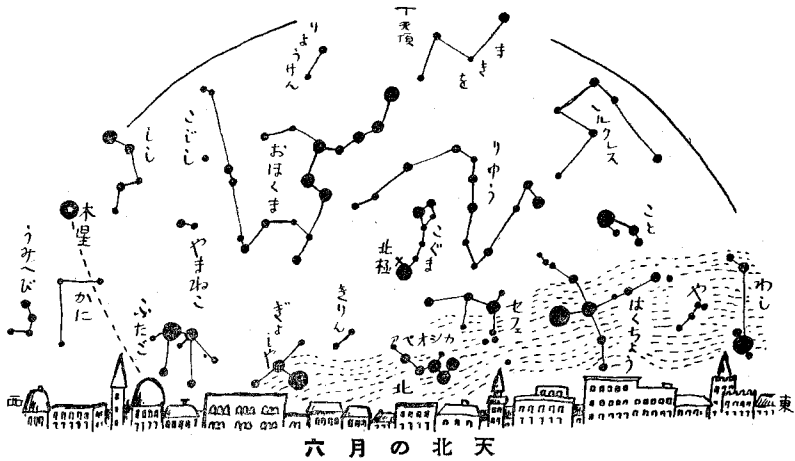
〔龍ヌ星〕

H IV. 37 Dra : 17h 59m N. 66°35′, 青味がゝつた橢圓形の遊星状星霧, γ Dra(龍ガ星)と北極星との間にあつて丁度黄道の北極の近所になつてゐます.

〔乙女座〕

γ Vir : 12h 37m S 1°0′, 非常に見事な約180年の週期を持つ連星, 1780年にはその相互の距離が6″. 1836年には細長い一個の星の様に見える許りでこれを分離することが不可能でした, 所がその後又漸次その間隔が開けて1891年には5.6″1914年には6″でした. 因みにこの連星は共に3½等の星です. 〔乙女ガ星〕

θ Vir : 13h 6m S 5°9′等星を伴つた4等星でその距離は7″に成つてゐます, 7/6極の望遠鏡の検査星としては難しいもの一つです, 併し Ward は1875年に6.4極鏡でこれを認めたと云ふことです. 〔乙女テ星〕



〔天象小文〕

影——幼い人類が影を測つてみました。神話の世界の雰圍氣に息づいてゐる彼等が理智の閃光に導かれて見えざる時を捕へやうと影を凝視めてみました。八尺の棒の投げかけた影は今極小の長さに縮まりました、中天太陽の高い夏至の正午です。彼等は目印の石を置き棒の根元からその石迄の長さを繩に切り取りました。そして既に日毎にその様にして測つては貯へてゐた古い繩の一つが全く夫れに一致すること知つて躍り上つたのです。又しても妖しい鬼神の國へ誘ふ影への専心が不思議にも彼等をして輝かしい智識の彼岸へたどりつかせました。彼等は知つたのです。八尺の棒の影の最長と最短の時が規則正しく巡つて來ることを、彼等はそうした二つの時期の間に幾度の日夜を重ねるかを計へ、短から長への秋の豊穡と冬の荒漢、長から短への春の芽生と夏の酷烈の思出を綴り合はせ、正しい年の長さの概念を獲たのです。見えざる時を明確に一年といふ檻の中に捕へたのであります。若し更に我々がこの最長の繩と最短の繩との差異の長さが棒の頂きに對して張る角度が何を意味するものかに考へ到るならば、この小さな試みこそ千分の一秒迄を豫言し精密と偉容を誇る今日の編曆天文學の地上への正しく二葉であつたと云つて誰がこれを拒み得るでせう。彼等こそ勝利者であります。自然科学的の推理を完全に遂行し眞の意味において完全に器械を抜ひこなし、麗はしき知識の成果を得、更にその知識をして空しく象牙の塔の中に朽ちしめず人生に利用活用せしめたからであります。

『春秋の中頃¹ (B.C.600)に至つては地面に垂直に立てたる棒の日中の影の長さを測り其最長最短の時期を以て日至とする方法が用ひられる様になつた。土圭を用ひて日至を觀測する様になれば、從來に比して必ずや二つの重要な變化が認められなければならないと思はるゝことで、第一には、從來の何れの方法に比しても遙かに精確に時期を定むることが出來、従つて一年の長さも精確に知れて長き太陽曆も出來ることになる筈であり、第二には觀測と關聯して、年の始めも冬至を理想的のものと思はる様になり、自然に冬至正月曆を用ふるに至るであらうと豫期さるゝことであるが、この二つ共に丁度春秋中頃なる文公宣公の時代に事實としてあらはれてゐる。』(新城博士、東洋天文學史大綱)

(癩蛙子)